

6、筋ジストロフィー患児の上肢機能について

徳島療養所、徳島大学

松 家 豊 奥 村 建 明

白 井 陽 一 郎

上肢変形の経時的変化とADLに関する補助的手段について検討した。

1. 1974～1977(3年5ヶ月)にわたりPMD、D型、30例(12～15才)について調査した手指変形の特徴はSwanneck変形とMP屈曲拘縮への進展であった。手指変形のうちSwanneck変形の曲型的なのは16才以上に出現、MP屈曲拘縮も同様に16才以上にみられ、stageⅧ以上であった(図1)

図1

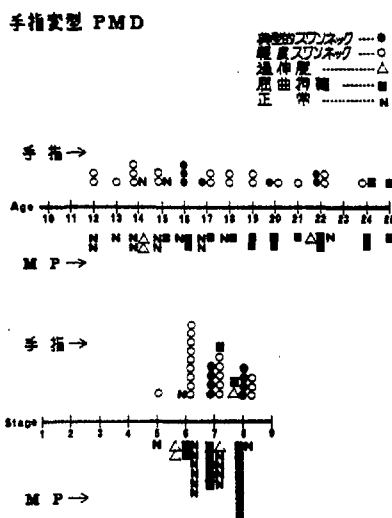
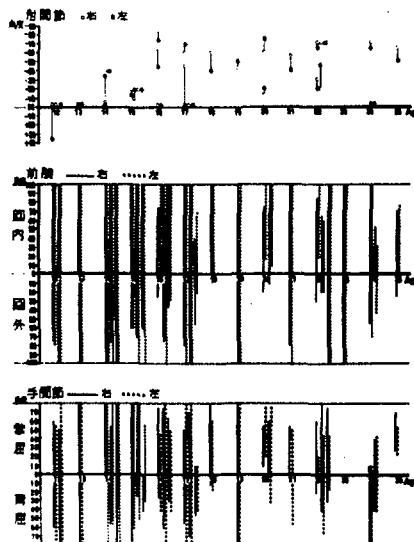


図2



手関節では背掌屈拘縮とくに背屈拘縮が年齢とともに多くかつ強くみられる。前腕では囲内、囲外拘縮とくに囲内拘縮がつよくみられる。肘関節では14才頃から屈曲拘縮が出現し、左右同程度8人、右が強い者12人、左が強い者7人であり、片側上肢による体幹支持との関連性がうかがわれた(図2)。以上上肢変形については屈筋優位、ADLによる肢位、肩、肘の廃用性萎縮などが関与している。

2. 上肢ADL評価を厚生省判定基準の5項目(上肢挙上、食事、書写、手拭をしぼる、洗面動作)について行った。15才以上では35～25%の評価点を維持するにすぎない(図3)。

上肢挙上は早期に障害されるが箸での食事、洗面、書写など手先動作は困難性はあっても最後

まで可能である。この目的動作のためには種々の代償動作が観察された。食事動作についてみると表に示した通りである(表)

3. 上肢動作の補助手段として種 (表)

々の試みがあるが肩、肘に対してはBFOがstage VII以上に必要である。手関節にはコックアップ型スプリントが必要と考えられる(図4)。上肢機能の分析と患者のニーズにもとづいた補助的手段が訓練の意味もふくめて検討されなければならない。

上肢の一般的機能訓練としては肩、肘、手関節のROM維持、筋力維持のため自動運動、抵抗運動ストレッチが行われている。とく

に今回の調査結果から囲内拘縮、手関節背屈拘縮に注目した訓練や処置の必要性を強調する。

図3

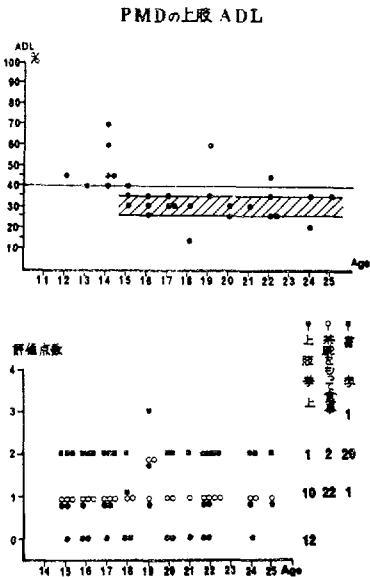
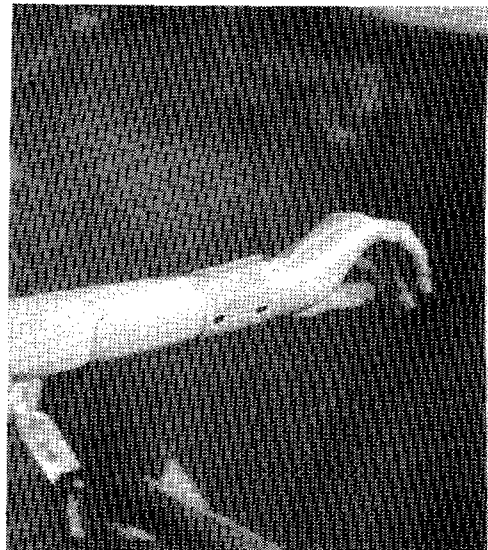


図4



↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

上肢変形の経時的変化と ADL に関する補助的手段について検討した。

1. 1974 ~ 1977(3 年 5 ヶ月)にわたり PMD、D 型、30 例(12 ~ 15 才)について調査した手指変形の特徴は Swanneck 変形と MP 屈曲拘縮への進展であった。手指変形のうち Swannek 変形の曲型的なのは 16 才以上に出現、MP 屈曲拘縮も同様に 16 才以上にみられ、stage 以上であった(図 1)